

少女は見ていた。

一面白に染まった無機質な部屋。白色に灯る照明に、避難標識の緑で彩られた味気ない部屋。白衣を着た人間達が硝子の向こうで行き来をして、たまにこちらに食事を提供する。その対価として実験を行う。その実験は優しいものだ。電極を繋いだり、心音を確かめたり、血液を採取したり。

そして少女の喜びは絵本を読む時間だった。本を読みたくて頑張って勉強した。自分でも書いてみたいと思ひ字も練習した。職員も咎めたりはしなかった。むしろ喜んでくれた。この情操教育ならあの方を目指せると喜んでいた。でも、その喜びは決して私個人を見てはくれなかった。

日常というのは突然に瓦解する。少女は見て学んだ。

白は紅に支配され、鼻につく異臭、遠くから響く苦悶の声、息を吸う度に喉が焼ける痛み。肌をじりじりと炙られる痛み。少女のあらゆる感覚が現実を否定にも肯定してくる。

「——悲しみの輪廻はここまでに至ったか」

黒に覆われた偉丈夫が少女を見下ろしていた。歳は五十過ぎだろうか。感情を押し殺したような目、威圧的でありながらも嘆く鋭い声。

周りの凄惨な景色が遠くに感じる。この二人だけ世界から切り離れたような錯覚。しかし、だからこそ

男の声は少女に響く。

「結論から聞こう。お前は生きたいか？ それとも死んでも大丈夫か？」

炎色に染まった黒い銃が少女の額に照準を定める。しかし、その行為は無駄に終わった。

「生きたい」

男の問いに少女は直ぐに答えた。男の顔が驚きに満ちていた。

「……最後の最後にこの変わり種か。それにしても即断とは……ふむ」

焦りながらの思案顔に年相応の落ち着きというものは感じない。

「考える時間が欲しいのだが、如何せん火の手が思ったより早いな。……まあなんだ、ついて来い。生きる意志が本物なら」

男は踵を返した。火の海がこの男に畏怖するかのようになり、男の歩む先に止める火はなかった。少女はこの男を魔法使いだと思ふ事にした。そう思ふ事で何だか楽しい事になりそうな気がしたから。

「名前はなんて言うんだ？」

遠くで燃える建物を眺めながら、男は尋ねた。少女は元気よく答えた。

「セリアって言うの！ 不束者ですが宜しくお願いします、おじさん！」

「連れていくと決めた訳じゃないぞ。生きたかったら自分で道を模索しろ」

「考えた結果がおじさんの後についていく事なの。セキニンって奴があると思うの」

——あの研究所のどこでこんな言葉を覚えたのか。男は嘆息すると、少女を置いて歩き出した。

少女は男の歩調に間に合うように、早足で後を追った。これが二人の旅の始まりであった。

旅は過酷なものだった。研究所のあった山奥から麓へ下り、荒れた平原を歩き、そして別の山を登り、峠を越えてまた下りる。野生動物を狩って食料にし、街を見つけたら水と保存食だけを買って出発。勿論、宿に泊まる事なんてしない。街が近くにあっても必ず街外でキャンプをして寝る。

徒歩での長旅はセリアを疲弊させていったが、それ以上に楽しかった。外の世界を歩く事は初めてで何もかも新鮮に感じた。知らないものを見つけては男に質問し、男は口少なくもきちんと答えを返してくれる。街に寄った後は、大体ご機嫌でいつも以上に饒舌になり説明してくれる。そして時折、自らの饒舌に気付き恥ずかしがってはいつもの口少ない状態に戻る。セリアは楽しそうに笑う。どんなに過酷な旅だつて歩いて行けそうだった。

「お前は研究所に居たんだろ？ それなのによく体力が持つな」

夜。舗装された道から少し外れて、草木がまばらに生えた柔らかな所で野宿をする事になった。薪を弄りながら男は質問を投げかけたが、その言い方にセリアはご機嫌斜めだ。

「セ・リ・ア！」

「……セリア、研究所で鍛錬でもしていたのか？」

要望通り男が名前を呼ぶとセリアは嬉々と反応を返した。

お前、と尊大に振る舞う男だが、セリアはそんな振る舞いを許さない。だから名前をきちんと呼んでも

らうまでは質問に答えない。男にも一度反発してセリアの質問に答えない時期があった。しかし、そんな時は嬉しそうな顔から一変、泣きだしそうな顔を浮かべて、その表情に男はひどく慌てて質問に答える事となった。

少女は既に泣き落としという女のスキルを物にしていたのだった。案外放ってはおけない性質の男がセリアをお前呼ばわりしなくなるのも時間の問題だった。

「研究所にはプールがあったから運動はしていたの。セリアが頼めば何だって用意してくれたから。外に出る事以外は何でも」

満足げにセリアは質問に答えた。勿論本当の事である。

セリアはこの旅が楽しくて仕方がなかった。この人で良かったと思う。少々不満なのは男が自分の名前を名乗らない事だ。でもそこは訊いてはいけない気がした。

どのような目的で研究所を燃やしたのか。これも同じ理由だった。もし訊いてしまえばこの関係は崩れてしまうのではないかと少女は怖れたのだ。

「……セリア、俺を恨んでいるか？」

だから今日はこの関係が崩れてしまう日なのかと感じた。

「他の研究所では、極悪非道な研究を行っていた。正直、同じ人間ではない、これは狂気の沙汰だと思いつ滅ぼしていた。新政府が樹立して以来、戦争を助長する研究機関は邪魔者となっていた。だからむしろ壊す事で金さえも貰っていた。だがセリアのところは少なくとも——」

焚火を眺めて話す男は、研究所の時とは打って変わって弱く脆い姿だった。もしかするとそのまま壊れ

てしまいそうなの。

「——恨んではいけないよ」

男の懺悔を遮る形でセリアは素早く答えた。嘘偽りなく、それは本心。

「色々と用意はしてくれたけど、記憶だけは駄目だったの。悪い感情——ここから出てみたいという感情が見受けられたら、その都度記憶を消されていたの。多分だけど、救ってくれなかつたら数日後にまた記憶が消されていたかもしれぬ。だから罪の意識を感じる必要はないと思う。これはセリアの問題で、おじさんが気を病む必要はないの」

「……こんな歳になってまで、いたいけな少女に諭されるとは俺もまだまだだな」

男は苦笑して、セリアを見た。それは迷いを断ち切った眼。研究所の時とは少し違っかっこいい眼。「では人生の先達として示そう——過去を持たないのなら先を見ればいい。セリアは生きたいと即断した。つまり、追い求めたい夢があつたはずだ。そして今もあるはずだ」

「夢……？」

「そう、夢だ。……先程は情けない姿を見せてしまったからな。お詫びとしてセリアの夢を追いかけてやろう」

「おじさんの夢は終わったの？」

「俺の夢はあの研究所でセリアと出会って覚めてしまったんだ。それに今はセリアに生きて欲しいと思うし、笑っていて欲しい。でも大きな夢だと一緒に追えないかもしれないから注意しろよ。まあ、大き過ぎたりして叶わなくても、夢が破れて大人になる事だつてある。それはそれで良い事にも……ええい！ ど

うしてこんな言い訳がましくなっているんだ」

男が髪を掻き筆っている間にセリアはゆっくりと自分の内に問う。短い過去は旅で埋め尽くされてきた。景色も動物も植物も街の中も教えてもらった。でもまだ見ぬものは沢山ある。あったのは戦争で疲弊して痩せた大地や禿げ山、研究所周辺の人工林。緑豊かな手つかずの自然というものを見た事がなかった。

「今まで辛く当たり過ぎたと思う。だからさ、宿を取ってもふかふかの布団で寝るのもいいし、おいしいご飯を食べるのもいい。服を買ってもいいぞ」

男は黙ったセリアの為に色々な案を出してくる。でもそれらはセリアにとって夢ではなくただの要望だった。だから真に心の底から望むものを考える。

ここにある自然、それは豊かなものではなかった。絵本の中にあるような豊かな自然を感じたかった。そしてそこに夢があった。

「決めた。おじさんと一緒にお花畑を見る」

「……それが今のお前の夢か？」

男はセリアの夢を笑う事無く、真面目な表情で訊いてくる。セリアは力強く頷いた。

「よし、決まった。手つかずの花畑なら俺の家の近くにあったはずだ。……銃とか物騒なもの持っている事から分かると思うが、俺はよく嫌われている。そんな嫌われ者は誰も訪れないような場所に居を構えている。つまり、遠いぞ？」

身を案じる男の顔を見て、セリアは嘖き出した。思いつきり笑った。これでもかって言うぐらいに笑った。だって、

「今までと同じ様に旅ができるんでしょ？　どんと来なさい」
二人の旅はセリアにとってこれ以上ない喜びだったのだから。



男の家までの旅は約半月に及んだ。険しい山道を登り、野犬の遠吠えに怯えながらの危険な夜も過ぎた。しかし、夢を示したあの夜以降、二人はより話すようになった。日が過ぎる毎に、この旅の貴重さを噛みしめていた。男の残りの時間は少ないと感じていたから。

それは男が時折せき込んで逃げようように手洗いに行っていた事を訝しみ、こっそりとセリアは後を追った時の事。川で洗っていた男の手と口が赤く染まっている事を知ってしまった。だからセリアは少しでも長く旅が続けばいいと思った。

男の家は山奥にも関わらず立派な家だった。元々は貴族の隠れ家として建てられたが、戦争下の混乱で逃げ遅れ、結局一度も使われずに放置されていたらしい。その事を知った男は嬉々として家主になった。

この家でセリアは二つ、今後生きる為の大事なものを得た。

一つは、透明な三角プリズム。埃の積もった男の家を掃除している時に偶然見つけたのがそのプリズムだった。書齋で手記を綴っていた男の所に訪れ、いつものようにこれは何なのかと訊いた。

「それはプリズムと違ってな。光を当てると虹色に光るんだ」
部屋のカーテンを閉め、光をプリズムに当ててみる。すると男が言った通りに鮮やかな虹色が机の上に照射される。

「……綺麗。透明なのに光を当てただけで虹色に光るなんてすごい！どこでも虹が見えるのね！」
セリアはいつにも増して興奮すると、男はそのプリズムをセリアにあげた。

「こんなので良ければ喜んで」

男にとっては些細なプレゼントをあげたようだが、セリアは本当に嬉しかった。無色から色が生まれる——何にもなかった自分が夢を追いかけられる。そんな喜びを噛みしめて。

そしてもう一つ大事なもの。それは一枚の古い写真だった。

この家に一泊だけする予定だったが、その日の夜、男は倒れた。血塗れになって倒れているその姿にセリアは泣く事しかできなかつた。

花畑に行く事は諦め、男の世話をする事三日目、男は帰らぬ人となった。男は死ぬ間際まで、セリアに謝っていた。花畑に行けなかつた事を涙流して悔み、謝って死んでいった。セリアが本当に欲しかった言葉はありがとうだったにも関わらず。それでもセリアは最後まで笑って男を看取った。独りで思いっきり泣いた。

セリアは悲しみに暮れ、少しでも亡き人の温もりを探そうと、書斎を漁っていると男の手記が見つかった。そしてその手記に挟まっていたのが例の写真だった。

その写真は一人の少女を写していた。セリアと非常によく似ている女の子。同じ眼、同じ髪色、同じ姿。

唯一違うのは髪長さぐらいか。その写真の裏には言葉が書かれていた。

アリスプロジェクト、オリジナル素体。

その計画名をセリアは知っていた。セリアの生まれた研究所でその計画に携わっていたからだ。セリアは静かに写真を見続け、そして決心した——男の隠した夢を求めに行く事を。



男を埋葬した後に訪れたのは、一緒に行く予定だった花畑。そこには確かにセリアが見たかった自然が広がっていた。一面が彩り豊かな花畑、彼方には雲海を貫いた壮大な山々が聳えている。そして空には雨上がりに光輝くプリズム色がセリアを見守っていた。でも隣には誰もいない、その事を意識してしまつてセリアはまた泣いてしまった。

泣き疲れた後、セリアは想像する。

男はどのような想いで研究所を壊していったのかを。

男はどのような想いでセリアと旅をしたのかを。

そしてセリアは想い出す。

——夢が破れて大人になる事だつてある。現にセリアの夢は大き過ぎて叶わなかった。

「だったら私は新たな夢を追う。その為には独りでも泣かない大人にならなくちゃいけない。そしてこの女の子を見つけ出すから」

セリアの人生を救ってくれたあの男に捧げる。セリアの決意を空の虹は、ポケットの中の虹はしつかりと聞いてくれただろうか。

CeliaとAlice。二人を巡るお話はまだ始まったばかり。

あとがき

第一作目を書いた翌日に書き上げたのが第二作目『プリズム』（表題含め4999字）となっております。

第一回獄卒SS企画に投稿した『未来鏡』、第二回最初に書きあげた『ライオット・イデオロギー』とは違った作風にしてみました。

勢いを重視していた前の作品と色々と差別化を試みたのですがどうでしたかね。私自身はテーマにもきちんとして沿って綴れたと満足しています。

たまに旅を試してみたいと思う事があるのですが、中々に実現しません。金銭的制約も勿論あるのですが、やはりきつかけというのがないからだと思います。

こういう所に行ってみたい、でも映像を見るだけで満足してしまうのでは？ 若しくは旅をするにあたって準備が面倒だと感じてしまうのでは？

そんな様々な言い訳要因を排除して、純粹に楽しみたいという目的で、まずテーマの『夢』と『旅』を合わせてみました。旅は浪漫ですからね。

そこに物語性と、他に書いてみたい要素を加えたのが今作となっております。

……このあとがきを書いていて気付きました。夢と旅って聞くと『Iの夢旅人』があるじゃないですかー。はい、気付いただけです。

あと結果的にドラマ性が強くなっているかなと思います。その為、当初の予定通りあの終わり方で締めさせてもらいました。

謎要素が結構あるので、想像好きな方にも楽しんでもらえたら幸いです。

さて、長くなり過ぎるとつまらなく感じてしまうと思うので、この辺であとがきは終わりたいと思います。ありがとうございました。